

## コミュニケーション能力の基礎を養う英語学習指導の工夫 －効果的な語彙指導を通して－

八重瀬町立東風平中学校 神里竜司

### I テーマ設定の理由

平成 24 年度から学習指導要領のもと、英語教育が大きく変わろうとしている。小学校にも英語活動が導入された。中学校においては、言語活動を充実させ、聞く・話す・読む・書くの 4 技能をバランスよく伸長されることが求められ、生涯の外国語学習の基礎を養う必要があるとされている。また、授業時数が増え、英語の授業で扱わなければならない語彙も、900 語程度から 1200 語程度に増やされた。国立教育政策研究所が平成 15 年に実施した教育課程実施状況調査の結果から、表現力が十分でないことがうかがえるため、語彙を増やし、表現力の向上を目指したものである。つまり、語彙の習得は、基礎的コミュニケーション能力をつけるための最も重要な基礎・基本の学習であると考えられる。

本校の現状を見ると、基礎的な語彙の習得に課題が見られる。昨年度の県学力到達度調査では、平均正答率が県全体を下回った。単語の書き取りの問題では、平均正答率が県よりも大幅に下回り、語彙の不足や、適切な表現を選択できていないという現状が浮き彫りとなった。授業でコミュニケーションを図る活動でも、使いたい語彙が思い出せず、とまどっている生徒が多く見られた。その手立てとして、補習時間の設定、家庭学習での学習法の指導、単語の繰り返し学習により、基本的な単語の定着に取り組んできたが、大きな改善にはつながらなかった。

その方法や指導を振り返ってみると、いくつかの課題がある。まず、機械的に書くだけの学習に終わっていること。正しく書くには、その単語を音読できなければならない。単語は音声化することができてこそ、理解できるからである。次に、反復練習のみの覚えるだけの学習であったこと。話す力へつなげるには、学習してきた単語を活用する場面を多く設定しなければならない。語彙は使えて初めて、有用な知識となるからである。もう一つは、適切な課題を与えられなかったこと。常に全体を意識するあまり、個々の状態を把握しきれなかった。その生徒に必要なと思われる指導事項を焦点化しなければ、学習に飽きを感じ、定着度を下げる結果となるからである。

そこで本研究では、学習した語彙を使用する表現活動を柱とした授業展開を行う。語彙を学習する際には、音声とスペリングの関係、その意味や働きをしっかりと理解させることに注意し、適切な課題を与え家庭学習を行わせ、生徒が語彙を正しく理解したかを、表現活動を通して判断する。この学習のサイクルを行うことにより、総合的なコミュニケーション活動を行うための基礎的能力が養われると考える。

実際の英語学習の中で、どのような語彙活動をすれば生徒が効果的に語彙を定着させることができるのかについて考え、語彙指導の工夫・改善を図り、中学校英語におけるコミュニケーション能力を高める学習指導に役立てていきたい。

### II 研究仮説と検証計画

#### 1 研究仮説

学習してきた語彙を使用する表現活動を柱とした授業を行うことにより、実際のコミュニケーションに生かすことができる語彙力が育ち、コミュニケーション活動を行うための基礎的能力が養われるであろう。

## 2 検証計画

事前調査で英語の学習状況の実態を把握する。方法としては、アンケートや単語テストを実施する。その結果を基に教材を作成し、検証授業を8時間行う。検証授業では始めに、語彙の音声・意味・用法などを理解させ、その語彙を用いたさまざまな表現活動に取り組みさせる。授業後のアンケート、事前・事後のテスト分析、ワークシートや自己評価カードを通して検証する。

① 事前調査	<ul style="list-style-type: none"> <li>調査内容：今までに使用した単語を使い、自己紹介やそれに対する質問を行う</li> <li>調査方法：アンケート、テスト、インタビュー</li> <li>実施時期：6月</li> <li>調査対象：八重瀬町立東風平中学校1年3組</li> </ul>		
② 検証授業	検証の場面	検証の観点	検証の方法
	展開 (ペアワーク・グループワーク)	<ul style="list-style-type: none"> <li>既習単語を使用し、いろいろな表現を使うことができたか。</li> <li>表現活動を行うことにより、既習単語の定着が図られたか。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>授業観察</li> <li>ワークシート</li> <li>自己評価シート</li> <li>発表内容</li> </ul>
③ 事後調査	<ul style="list-style-type: none"> <li>事前(6月)と事後(7月)テストとアンケートの分析</li> <li>事前(検証前)と事後(検証後)の単語テストの比較</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>検証授業後のアンケート</li> <li>単語テストの比較</li> <li>自己評価カード</li> </ul>
<b>検証の視点</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>自分の意見を伝える表現活動を柱とした授業を展開することで、語彙力が育ち、コミュニケーション活動を行うための基礎的能力を養うのに有効であったか。</li> </ul>			①②③の結果の分析・考察

## III 研究内容

### 1 コミュニケーション能力の基礎を養う指導について

#### (1) コミュニケーション能力の基礎

政治や経済をはじめ、様々な分野において国のボーダーレス化が加速する中、外国人と接する機会が、より多くの分野で増えてきている。今日、英語を使ってコミュニケーションを図ることができる人材が求められ、その能力を身につけることが必要とされており、中学校学習指導要領の外国語科の目標(表1)においても、コミュニケーションの基礎を養うことの重要性が述べられている。

表1 中学校外国語科の目標

外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う。

また、今回の改訂の基本方針の1つに以下(表2)のことがあげられている。

表2 中学校指導要領外国語科改訂の基本方針

「聞くこと」、「話すこと」、「読むこと」及び「書くこと」の4技能の総合的な指導を通して、これらの4技能を統合的に活用できるコミュニケーション能力を育成するとともに、その基礎となる文法をコミュニケーションを支えるものとしてとらえ、文法指導を言語活動と一体的に行うよう改善を図る。また、コミュニケーションを内容的に充実したものとするができるよう、指導すべき語数を充実する。

これは4技能をバランスよく育成するためには、文法規則や語彙などの知識をしっかりと身につけさせる必要性を述べている。しかし、基礎となる内容を学習したとしても活用に至らなければ、コミュニケーション能力の基礎を養ったとは言いがたい。やはり、学習した知識を積極的に活用し、

様々な場面で意志を伝達する活動を行えるかが、コミュニケーション能力の基礎だと考える。コミュニケーション能力とは伝達能力であり、他者と上手に意思伝達を図ることのできる力と捉える。

## (2) コミュニケーション能力を養う指導

中学校外国語科の基礎的・基本的な知識・技能とは、学習指導要領に示されている目標及び内容のことである。外国語科の目標を踏まえ、英語では次のような具体的な目標(表3)が示されている。

表3 中学校英語の具体的な目標

- |  |
|--|
| ① 初歩的な英語を聞いて話し手の意向などを理解できるようにする。                 |
| ② 初歩的な英語を用いて自分の考えなどを話すことができるようにする。               |
| ③ 英語を読むことに慣れ親しみ、初歩的な英語を読んで書き手の意向などを理解できるようにする。   |
| ④ 英語で書くことに慣れ親しみ、初歩的な英語を用いて自分の考えなどを書くことができるようにする。 |

これは、4技能に分けて英語の目標を示したものであり、金子(2008)は、「具体的にそれらの技能をコミュニケーションの場で駆使できる、一歩踏み込んだ能力の育成を目指す必要がある」と述べている。

しかし本校では、英語を使った基本的な語彙の定着が不十分なため、コミュニケーションが十分に行われていないのが現状である。その理由を探るため、3学年にアンケートを行った結果、56%の生徒が「単語を覚えるのが難しい」と回答している。これは、中央教育審議会答申(2007)において「中学校・高等学校を通じて、コミュニケーションの中で基本的な語彙や文構造を活用する力が十分身に付いていない」と指摘されていることと共通する。コミュニケーションの基礎を支える語彙の指導で、何らかの手立てが必要だといえる。語彙や文構造を活用する力は4技能の素地となる部分であり、コミュニケーション能力を養うにはまず、語彙の定着を図る必要があると考える。

## 2 語彙指導について

### (1) 語彙習得の段階

英語でコミュニケーションを図るために必要となるスキルの一つが、語彙の習得である。そこで語彙をどのように増やし、定着させるかを、まず考えなければならない。語彙学習において必要とされる語彙知識について、Nation(1990)は次の8項目(表4)を挙げている。

表4 語彙学習において必要とされる語彙知識

- |              |                    |              |
|--------------|--------------------|--------------|
| ①語彙の意味を知ること  | ②語彙の表記(スペリング)を知ること | ③語彙の発音を知ること  |
| ④語彙の用法を知ること  | ⑤語彙と語彙の結びつきを知ること   | ⑥語彙の使用域を知ること |
| ⑦語彙の派生語を知ること | ⑧語彙の使用頻度を知ること      |              |

実際の授業の中で、新出語彙のこれら全ての項目を、生徒が一度に学べるような指導を行なうことは難しい。まず、新しい語彙を理解するために①～③の項目を学習させ、その後実際に使うことを目的に、④～⑤項目を表現活動の中で身につけさせる。⑦⑧の項目は、記憶に残す学習として、その内容を徐々に気づかせていくという段階的な取組を行う。

### (2) 既習の語彙を活用したコミュニケーション活動

語彙の導入に際し、望月(2003)は「語形の明確なイメージを持つことは、単語を思い起こす上で重要になる」と述べている。効果的であると思われる方法は、その語が持つイメージをつけさせることと考える。そのためには、実物・絵・写真を使用して語を導入すること。そして、具体的な場面や状況を意識させながら、その語を指導することである。そこで、実際のコミュニケーション活動の中で、生徒の興味関心を考慮しながら指導語彙を選択し、既習の語彙と組み合わせながら、理解力を高め、学習した語を使う機会を多く設けることにより、より楽しく語彙を増やし、その知識を深めることができるコミュニケーション活動を展開していく。

### (3) 表現活動

学習した語を使うには、まずその語を使い、表現をすることである。学習指導要領には、「言語活動の取り扱い」の(イ)で、「実際に言語を使用してお互いの気持ちを伝えあう活動においては、具体的な場面や状況に合った適切な表現を自ら考えて言語活動ができるようにすること。」と記述されている。田中武夫、田中知聡(2003)は、自己表現を中心にする授業を、「自分の考えや思いがある。目的達成の手段としての言語活動がある。他者との関わりがある。自己との関わりがある。」と述べている。ここでは表現活動を、自由に自分の思いや考えを伝えることであり、感じたことや考えたことを発信でき、それと同時に、相手の考えや意見を汲み取り、その場面にふさわしい表現ができることと捉える。

### (4) 表現活動を柱とした指導の工夫

表現活動を柱とすることにより、機械的な繰り返しの暗記学習ではなく、学習してきた語彙を使用する活動となる。また、表現させる内容により、使用する語彙の頻度に間隔をあけることができ、生徒は自然に何度も既習語彙を用いた活動を行うこととなり、語彙の定着が図れる。Hatch and Brown(1995)は言語学習過程を「ふるいの連続」にたとえて、以下5段階があると定義している(図1)。

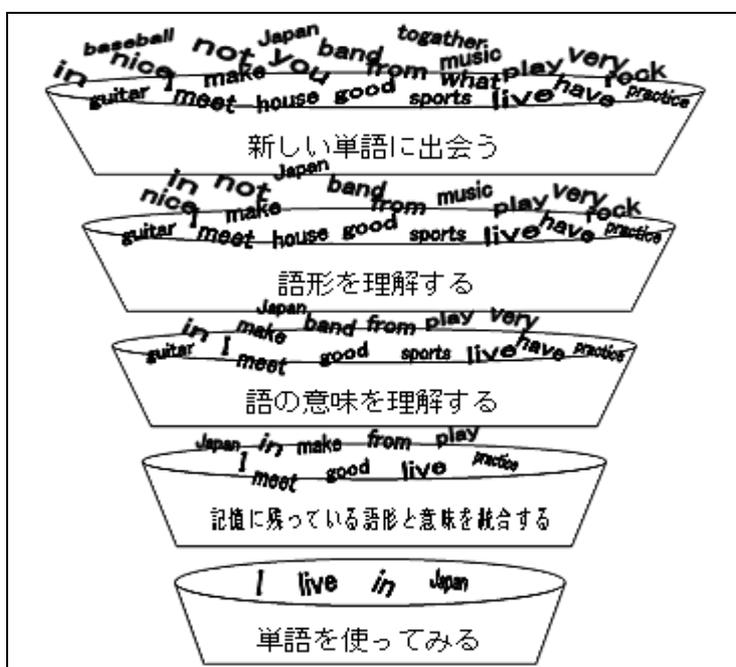


図1 語彙習得過程「ふるいの連続」(Hatch and Brown, 1995 改変)

覚えた語彙を記憶に残すためには、既習語を用いた表現活動に取り組む必要があり、その活動を発展させることができれば、語彙の定着が図れ、生徒のコミュニケーション能力を伸ばす原動力ともなる。松浦(2008)は、『理解させてから使用させる』という単線的な発想から脱却して、『使用の中で理解させ、さらに使用させる』という使用を中心とした双方向の指導が求められる』としている。これらのことから、既習した語彙を用いて、表現活動に取り組むことが、コミュニケーション能力の向上に有効な手だてであると考えられる。そこで本研究では、学習した語彙を活用させることにより、自分の考えや意見を伝えたり、相手に尋ねたり、質問に答えたりすることができる力を身に付けさせることを目標とする。生徒にとって身近な会話のやりとりが行える場面設定を工夫し、ペアやグループでの相談を通し、表現を改善させながら授業を進めていく。

## IV 授業実践

### 1 検証授業の指導

(1) 単元名 Lesson 3 Hello, Everyone. 初めまして (Total English New Edition 1)

## (2) 単元の考察

- ① 生徒の実態 (省略)
- ② 単元観 (省略)
- ③ 指導観

生徒は小学校の外国語活動で、自分のことについて「～である。」や「～をする。」などの表現を体験してきている。本単元ではその内容を活かし、さらにまとまった文章で自己紹介を行う。新たに習った表現や学習してきた語彙等も加え、語と語のつながりや文のまとまりについても、丁寧に指導していきたい。自分のことを他人に分かりやすく伝える活動を通し、コミュニケーション能力を向上させるために、「どんな語彙が使われているか」「今どんな表現をしたか」などの発問や声かけをし、発言が活発な生徒だけでなく、理解力に不安のある生徒や集中力にやや欠ける生徒の学習意欲も喚起したい。また、授業毎に宿題を出し、学習した語彙や表現に繰り返し触れさせることにより、語彙や表現方法の定着も図って行きたい。

## (3) 指導目標

- ① 基本文を用いた表現活動に積極的に取り組むことができる。  
(コミュニケーションへの関心・意欲・態度)
- ② 基本文にある表現を用いた文を、正しく話したり書いたりできる。(表現の能力)
- ③ 自己紹介やそれへの質問を聞いて、その内容が正しく理解することができる。(理解の能力)
- ④ 基本文にある be 動詞の文構造を理解し、一般動詞と区別して活用することができる。  
(言語や文化についての知識・理解)

## (4) 評価規準

	A コミュニケーションへの関心・意欲・態度	B 表現の能力	C 理解の能力	D 言語や文化についての知識・理解
聞く	①教師や友達の話に興味を持って聞く。		①聞いた内容について正しく聞き取ることができる。	①be 動詞の文構造や一般動詞との違いを理解している。
話す	②間違いを恐れず積極的に英語を話す。	①今まで習った単語や新しく習った表現を使って話すことができる。	②聞いた内容について正しく答えることができる。	②be 動詞を使い、自分の考えをしっかりと伝えることができる。
読む	③辞書を活用して調べている。		③本文内容について正しく読み取ることができる。	③使用した語彙の知識を習得している。
書く	④テーマに沿った自分なりの考えをまとめる。	②伝えたい内容を正確な表現を使って書くことができる。		

## (5) 指導と評価の計画

時数	ねらい	学習活動	評価規準	評価方法
第1時	・一般動詞の文構造の定着 ・新出単語を理解 ・使える語彙の確認	・一般動詞が使われた文を作る。 ・辞典で語彙を調べる。	A③ B①	・テスト ・活動の観察/生徒の応答 ・自己評価カード
第2時	・be 動詞(am)の肯定文の文構造を理解 ・一般動詞との違いを理解	・be 動詞の肯定文を作る。 ・自分のことを伝える。 ・聞いた内容を理解する。	C① D②	・ワークシート ・活動の観察/生徒の応答 ・自己評価カード

時数	ねらい	学習活動	評価規準	評価方法
第3時	<ul style="list-style-type: none"> <li>・be 動詞(am)の否定文の文構造を理解</li> <li>・am と are の違いを理解</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・be 動詞の否定文を作る。</li> <li>・自分のことを伝える。</li> <li>・聞いた内容を理解する。</li> </ul>	C① D②	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ワークシート</li> <li>・活動の観察/生徒の応答</li> <li>・自己評価カード</li> </ul>
第4時	<ul style="list-style-type: none"> <li>・be 動詞(are)の疑問文の文構造を理解</li> <li>・一般動詞との違いを理解</li> </ul> 	<ul style="list-style-type: none"> <li>・be 動詞の疑問文を作る。</li> <li>・相手の情報を聞き出す。</li> <li>・聞いた内容を理解する。</li> </ul> 	A② C②	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ワークシート</li> <li>・活動の観察/生徒の応答</li> <li>・自己評価カード</li> </ul> 
第5時	<ul style="list-style-type: none"> <li>・what の疑問文の文構造を理解</li> <li>・Let's の表現を理解</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・what を使った文を作る。</li> <li>・相手の情報を聞き出す。</li> <li>・Let's を使った文を作る。</li> </ul>	A① B①	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ワークシート</li> <li>・活動の観察/生徒の応答</li> <li>・自己評価カード</li> </ul>
第6時	<ul style="list-style-type: none"> <li>・いろいろな動詞を使った作文</li> <li>・伝えるために必要な単語や表現の活用</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自己紹介文を作る。</li> <li>・自己紹介の練習をする。</li> <li>・自己紹介をする。</li> <li>・自己紹介を見直す。</li> </ul>	A④ B① B②	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ワークシート</li> <li>・活動の観察/生徒の応答</li> <li>・自己評価カード</li> </ul>
第7時 (本時)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・いろいろな形の質問の理解と表現</li> <li>・質問するために必要な単語や表現の理解</li> </ul> 	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自己紹介を聞く。</li> <li>・相手への質問を考える。</li> <li>・相手へ質問をする。</li> <li>・質問に答える。</li> </ul> 	A② B① D③	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ワークシート</li> <li>・活動の観察/生徒の応答</li> <li>・自己評価カード</li> </ul> 
第8時	<ul style="list-style-type: none"> <li>・be 動詞の肯定文, 否定文, 疑問文の定着</li> <li>・本文内容の理解</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習事項を振り返らせる。</li> <li>・本文の内容を理解させる。</li> <li>・単語を確認する。</li> </ul>	C③ D①	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ワークシート</li> <li>・活動の観察/生徒の応答</li> <li>・テスト/自己評価カード</li> </ul>

## (6) 本時の学習

### ① 学習目標

学習してきた表現を用いて、積極的に相手に尋ねたり、質問に答えたりすることができる。

### ② 授業仮説

既習の語彙や表現を使用することにより、積極的にコミュニケーション活動に取り組むことができるであろう。

### ③ 言語材料

一般動詞( live / practice / sing など), be 動詞( am / are ), 疑問詞( what ), 感情や状態を表す形容詞

④ 評価の観点と具体的な評価規準

評価の観点	評価場面	具体的な評価規準		
		A十分満足できる	Bおおむね満足できる	C努力を要する生徒への手立て
コミュニケーションへの関心・意欲・態度	観察 自己評価カード	自らすすんで活動に取り組んでいる。	促されて発表や活動に取り組む。	単語の意味、発音を確認する。
表現の能力	ペア・グループワークでの応答	既習の表現をいくつも使いながら活動する。	既習の表現を使って取り組んでいる。	どの表現を使えばいいか確認する。
言語や文化についての知識・理解	テスト ワークシート	動詞を使った文構造をしっかりと理解している。	動詞を使った文を作ることができる。	使用する文の発音や使い方を確認する。

⑤ 展開

過程	学習内容・学習の流れ	評価	留意点
導入 5分	あいさつ ①warm up-単語の確認する。 ・絵を見て連想！単語テストを行う。 ②既習事項を確認する。 Are you ~? Yes, I am. / No, I'm not. Do you ~ ? Yes, I do. / No, I don't. What do/are you ~ ? ③めあてを確認する。 相手に質問したり、それに答えることができる。	単語が正しく書けているか(D③テスト)。 	・単元新出単語を使う。 ・基本表現となる文を黒板に提示する。 ・評価カードに記入させる。
展開 40分	④教師の自己紹介文を聞く。 Hello, everyone. I'm Kenta Nakamura. I'm 34 years old. I live... ・メモを取りながら内容をつかむ。 ⑤質問を考える。 ・Do/Are/What で始まる質問をする。 ・答えを理解する。 ⑥ペアで自己紹介をする。 ・互いに自己紹介をし、メモを取る。 ・聞いた情報以外の質問を考える。 ・質問し、答えのメモをとる。 ⑦相手に質問されたことを確認する。 ・ワークシートを交換し、点検する。 ⑧ペアで発表する。 ・自分の表現を見直す。 ⑨違う人に自己紹介をする。 ・違う質問を考える。	聞いた内容について大切な部分を聞き取れているか(D③応答)。  疑問文の表現を理解しているか(A②観察)。 しっかり発表できているか(B①ワークシート)。 聞かれた質問に対し正しく答えることができているか(D③ワークシート)。	・英語科以外の先生に自己紹介してもらおう。 ・紹介文を黒板に掲示する。 ・質問を種類分けし、板書する。 ・ワークシートを活用させる。 ・机間巡視をして個別指導をする。 ・既習の表現を使うよう支援する。 ・わからない単語は辞書を使って調べるように促す。 
まとめ 5分	⑩自己評価の記入する。 ⑪次時の学習内容を知る。 あいさつ	英文を正しく書くことができるか。 課題を達成することができたか(D③自己評価カード)。	・弱点や理解できていない箇所を確認させる。 ・宿題を確認する。

⑥ 本時の評価

学習してきた表現を用いて、積極的に相手に尋ねたり、質問に答えたりすることができたか。

(ワークシート、自己評価カード)



写真1 板書の内容



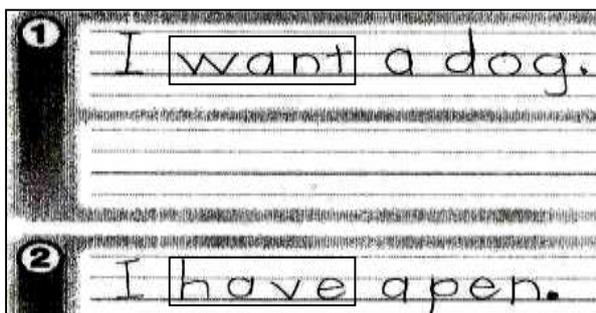
写真2, 3, 4 授業の様子

2 授業仮説の検証

本時の授業仮説について、生徒の発表内容、自己評価カードやワークシートを基に考察を行う。

(1) 既習の語彙や表現を使用することができたか

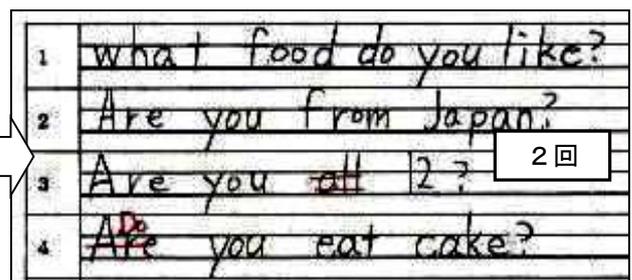
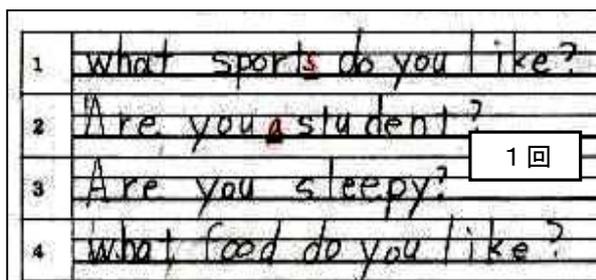
資料1は生徒が書いた自己紹介文の一部である。既習の語彙(want/have)が使われている。学んだ語彙を使用し、それを表現に活かしていることがわかる。ペアやグループでお互いに教え合う取組(写真5)により、語彙の使い方や語順などに気づき、表現が広がっていることがわかる(資料2)。授業の感想からは、間違いを起こす不安から解消されたことがうかがえ、この学習方法が有効であったと考える。



資料1 生徒が書いた自己紹介文



写真5 お互いに教え合う場面



資料2 生徒のワークシート

(2) 積極的にコミュニケーション活動に取り組んでいたか

本時の表現活動では、自己紹介を聞き、その人に質問をし、それに答えてもらうという場の設定と同時に、書いて記録を残す作業も行なわせた。これまでは、自己紹介を聞くだけで終わっていたが、その内容に質問するという相互の学習活動を加えたことにより、ワークシートを空白で提出する生徒が一人も出なかった。また、これまでは取り入れていなかった、学習した新しい表現を記入する項目を自己評価カード(資料3)に設けた。ペアとのコミュニケーションをとる際、そのカードを見直して学習を進める場面がよくみられた(写真6)。各自が既習事項を使う努力を積み重ねることにより、表現活動への意欲が高まったと考える。

Date	ねらい	Sentence	記録欄
July 9th	自己紹介の文をつくる	I live in ~	• 単語と英文どしどし覚える事ができた
July 10th	自分のことを英語でいえるようになる	I am a student. I live in Iha.	• 英文を覚える事ができた
July 11th	自分のことを英語でいえるようになる	I am not a shoppy	• 否定文を作る事ができた

資料3 自己評価カード



写真6 見直して活動を進める生徒

V 研究の結果と考察

1 表現活動で使用する語彙について

生徒の学習段階において、実際の表現活動で使える語彙量を考慮し、小学校で使用していた語彙(brother/sisterなど)を活用した。また、教科書に出てくる語彙以外でも生徒が使いたいと思う語彙があれば授業で導入し、それらを用いて表現に活用できるよう支援した。図2の生徒のアンケート結果をみると、授業前に比べ、覚えた語が増えたと答えた生徒がほとんどである。検証期間で平均すると一人あたり9.5個の単語を覚えたことになる。20個以上覚えた生徒は35人中、10人いた。生徒の記録(資料4)を見ると、覚えた単語が授業を通して増えていくのがわかる。

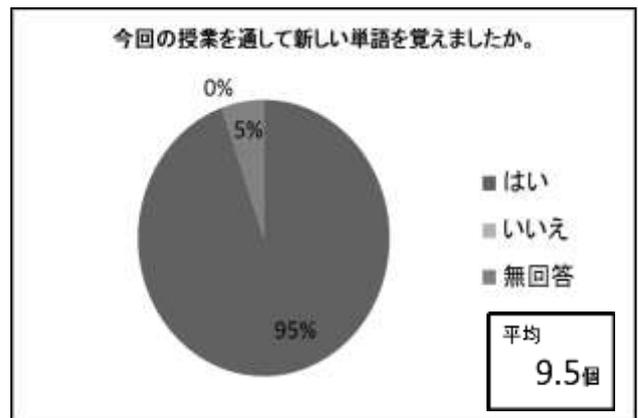


図2 新しい語彙をいくつ覚えたか

今日の単語			
☆今日調べたり、新しく知った単語を記録しておこう☆			
	英語	日本語	
1	What	何ゼ?	6
2	Nice to meet you	会いたうたいや	7
3	am	あま	8
4	live	あんでる	9
5			10

検証授業前半

今日の単語			
☆今日調べたり、新しく知った単語を記録しておこう☆			
	英語	日本語	
1	student	生徒	6
2	Japan	日本	7
3	base	ベース	8
4	ice cream	アイスクリ-ム	9
5	handball	ハンドボール	10

検証授業後半

資料4 覚えた語彙の記録

また図3を見ると、95%の生徒が以前より上手く自分のことを伝えることができたと感じている。前よりもいくつかの文が言えるようになったかの質問に対しては、平均すると一人あたり5.5文という結果となった。これは、表現活動で使える語を増やしたことにより、伝えたいことを表現できるようになったからだと考える。授業で取り扱った語以外にも、辞書を使って調べる生徒が多くみられた。本検証では、定着させるために繰り返し使用する語(live/what など)と、表現活動を行う際に必要と思われる語(handball/ice cream など)の両方を学習させた。

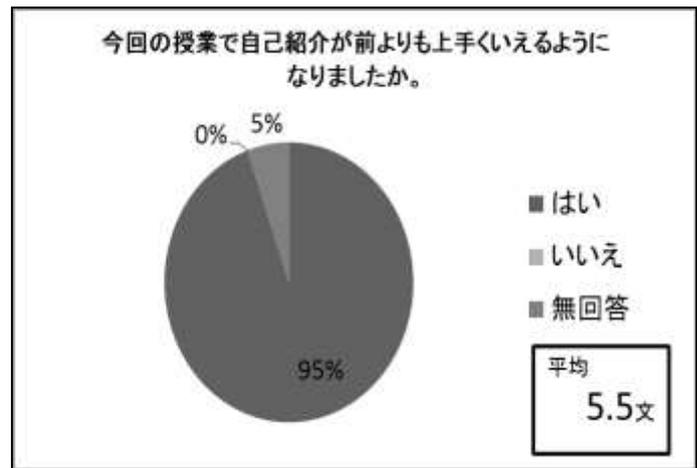
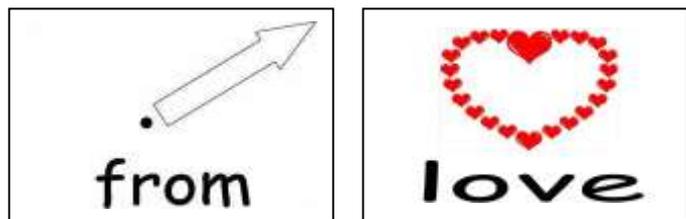


図3 新しい表現がいくつできたか

また、生徒が難しいと感じた語彙は、カタカナで表記することを認め、書けないから使わないという意識を持たせないようにした。学習後、追加して学習した語彙について難しく感じたかを生徒に質問したところ、ほとんどの生徒が「難しく感じることはなかった。」「問題なく使うことができた。」と答えた。生徒の興味や実態を踏まえ、学習する語彙を増やしたことで、生徒のコミュニケーション活動の幅を広げることができたといえる。

## 2 語彙の指導方法についての工夫

新出語彙を指導する際、今まではフラッシュカードを用い、文字を見せてから指導を始めることが多かった。今回は最初から、語に対するイメージを持たせるため、ジェスチャーや写真、絵(資料5)、可能であれば現物を先に提示した。その後、それらの発音練習を行い、スペリングを提示し、書く練習をするという流れで指導した。語の定着を確認するために、単語テストも実施した。従来は、日本語から英語に直す方法だけであったが、今回は絵を見て、語を考える方法も取り入れた(資料6)。その後、学習した語を、表現活動で使用させ、使える語を増やし、その定着を図った。その結果、生徒からは「絵やジェスチャーを思い出したら単語が浮かんだ。」「これまでよりも楽しく学習できた。」「繰り返し学習したので覚えることができた。」などの意見がでた。このことより、導入方法を工夫し、イメージを持たせることと、繰り返し活用させることが、語彙力を育てることに有効であったと考える。



資料5 ピクチャーカード

☆絵を見て連想！単語テスト☆

- 次の絵は何の単語を表しているでしょうか。
- 先生の各回で、その絵が表している単語とその意味を書きましょう。
- 制限時間は1分です。

1		2		3	
4		5		6	
	英語	日本語		英語	日本語
1			4		
2			5		

資料6 絵を見て答える単語テスト

## 3 積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成について

検証授業前のアンケートでは、楽しかった活動に、ゲーム的な要素が含まれるアクティビティと答える生徒が多かった。それに対し、授業後は、自己紹介や会話をする事など、実際のコミュニケーション活動が楽しかったと答える生徒が6%から43%となった(図4)。教師が表現活動を行う場面設

定を工夫することにより、具体的にコミュニケーションを図ることに興味を持つようになったと考える。既習の語彙を活用し、自らの考えを伝え、相手の考えを聞く、というコミュニケーション活動を体験したことにより、学んだ語彙を活用する楽しさを感じたのではないかと。

また、今回の検証を通して、授業に対する理解度が大幅に改善された(図5)。実際に表現する場を一度で終わらせるのではなく、自分の間違いを見直した後、もう一度機会を与えるという授業展開を行ったことと、授業で使ったワークシート(資料7)を活用し、その日間違えた表現を、再度考させる取組みを家庭学習で行なわせたことが、この結果につながったと思われる。

以上のような取組から、授業が楽しいと思う生徒も37%から67%に増加した(図6)。このことから、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成することに、効果があったと言える。今後は更に、その状況や場面に沿ったコミュニケーションを図れるよう、語彙や表現を深く理解させる必要があると考える。

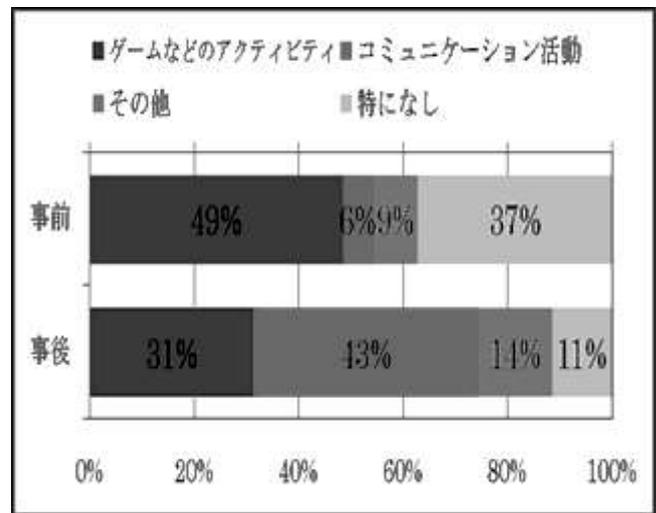


図4 授業で楽しかった活動

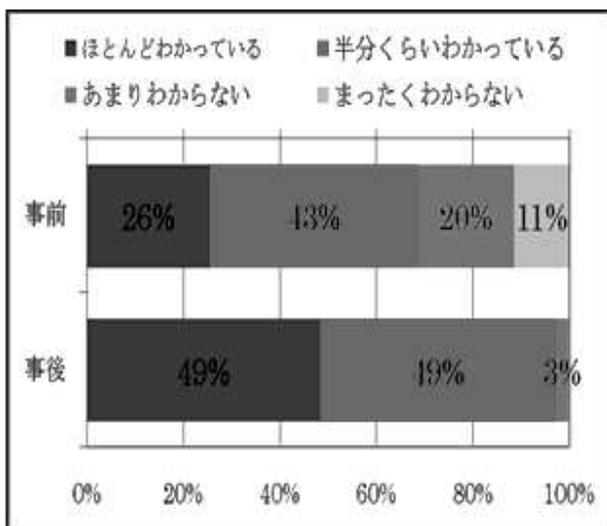


図5 授業をどれくらい理解できたか

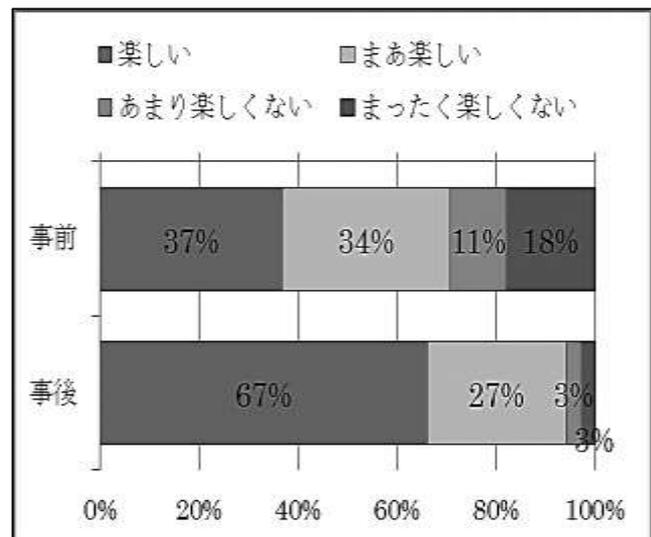
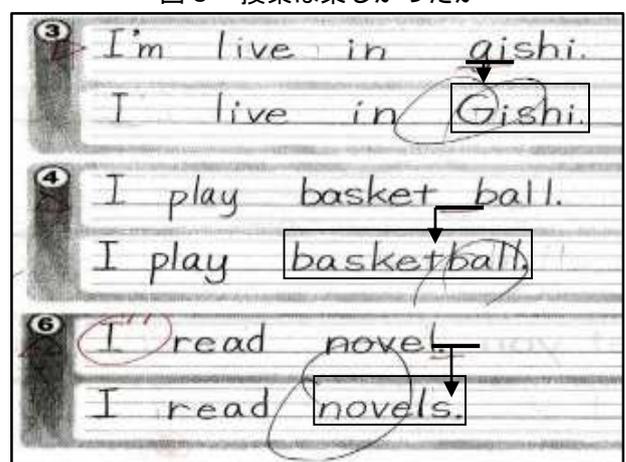
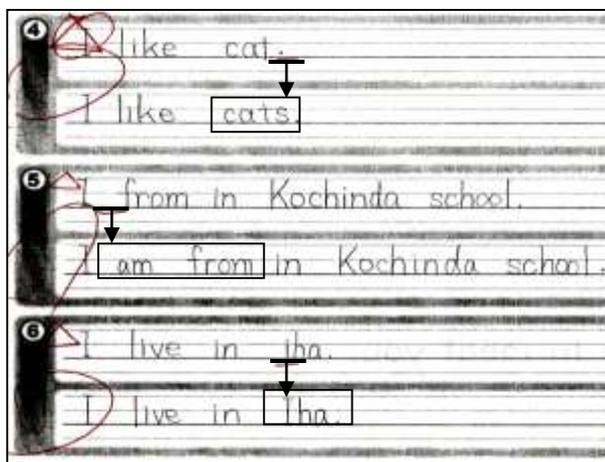


図6 授業は楽しかったか



資料7 見直しを行わせたワークシート

## VI 研究の成果と今後の課題

### 1 研究の成果

- (1) 語彙の導入を工夫し、小学校で学んできた語や教科書以外の語も取り入れることにより、生徒のコミュニケーション活動の幅が広がり、語彙の定着が図れた(V-1, 2)。
- (2) 表現活動で、新しく学んだ語彙と既習の語彙を組み合わせ活用することが、コミュニケーション能力の基礎を養うのに効果的であった(V-3)。

### 2 今後の課題

- (1) 覚えた語彙を繰り返し活用させる指導の工夫(V-2)。
- (2) より自然に、継続的なコミュニケーション活動が行える指導の工夫(V-3)。
- (3) 英語が書けない、読めない生徒への支援の工夫。

### <主な参考文献>

中央教育審議会	『教育課程部会におけるこれまでの審議のまとめ』		2007年
文部科学省	『中学校学習指導要領解説 外国語編』	開隆堂	2010年
田中武夫／田中知聡著	『「自己表現活動」を取り入れた英語授業』	大修館書店	2003年
望月正道 他著	『英語語彙の指導マニュアル』	大修館書店	2003年
金子朝子／松浦信和／平田和人 他編著	『中学校新学習指導要領の展開』	明治図書	2010年
Nation, I. S. P.	Teaching and Learning Vocabulary	Newbury House	1990年
Hatch, E. and Brown C.	Vocabulary, Semantics, and Language Education.		
	Cambridge: Cambridge University Press.		1995年
Nation, I. S. P.	Learning Vocabulary in Another Language.		
	Cambridge: Cambridge University Press.		2001年